

11	小國203
学 図	

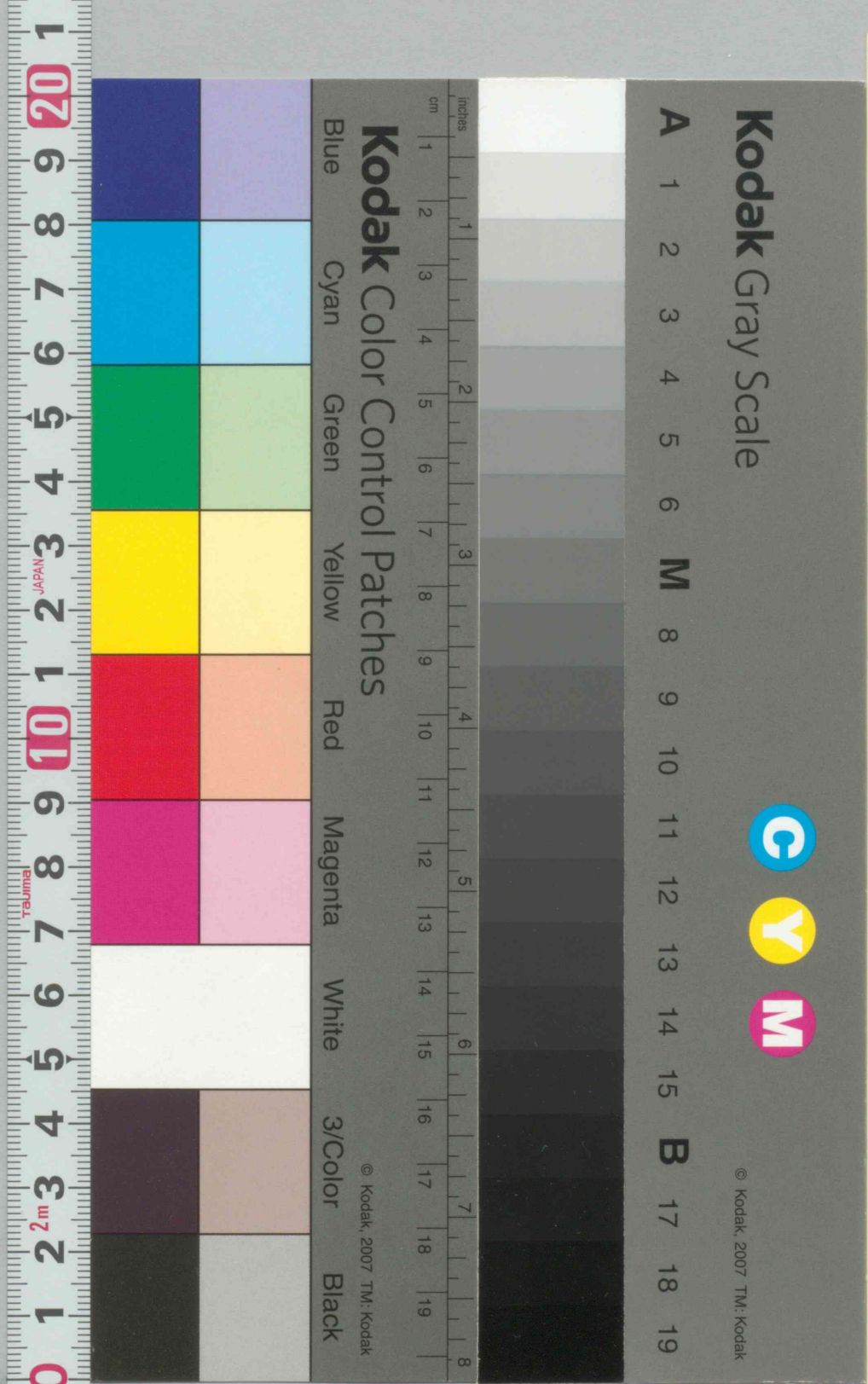
教育部
資料室
財團法人
文部省檢定済教科書
日本新教育研究会編修

八ノ
ノ
ノ



学校図書株式会社発行

11KC
G16



50459

教科書文庫

5
810
34-1948
01304 49585

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



贈 寄

昭和二十三年九月一日文部省検定済



中央図書館

広島大学図書

0130449585





十	ことば	五十六
十一	むくどりのゆめ	五十九
十二	雪	七十五
十三	いもうとのにっき	七十八
十四	小鳥のうた声	八十三
十五	もしも雲にのれたら	八十九
十六	さむいばんの話	九十六
十七	ことばあつめ	百三
十八	たいようと北風	百八
十九	うぐいすのうた	百十六
二十	春がくる	百十八
二十一	フィリップと学校	百二十二



一	おかあさんの目	四
二	うらの林	八
三	ねこ	十二
四	かかし	十七
五	お月夜	二十八
六	おちぼひろい	三十
七	だいこんひき	三十七
八	てつだい	四十五
九	けが	四十九

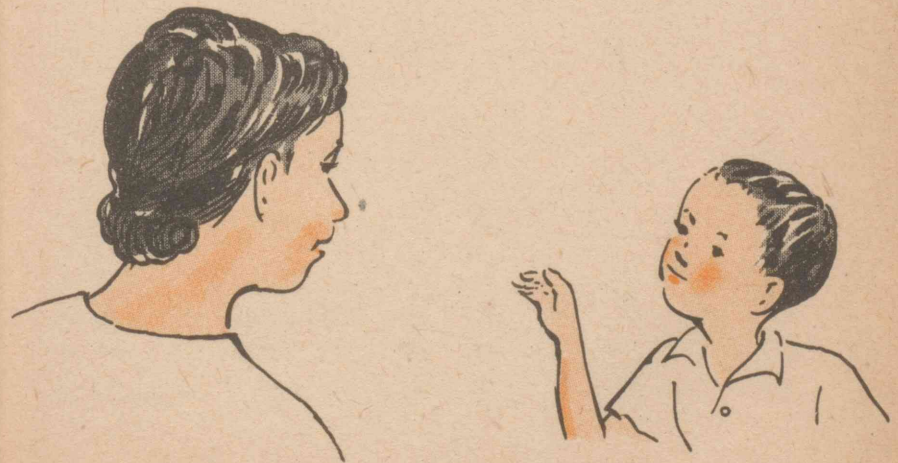
もくろく

一 おかあさんの目

「おかあさん、世界じゅうで おかあさんはだれがいちばんすき。」

と、ぼくはたずねました。
おかあさんは、わらって ぼくのかおをみて いました。

「お月さま、お星さま、カナリヤ、それとも おしろの王さま。」



おかあさんは ぼくを しっかりだいて、いくども ほおずり してくれました。そして 小さな 声で、「うちの いたずらっ子が いちばんすき。」

と 言って、ぼくのかみを なでました。

ぼくは あんまり うれしかったので、おかあさんの黒い ほうせきのような 目を じっと みました。ぼくは びっくり しました。

おかあさんの 黒い 目の 中には、小さな ぼくが、
そっくり はいりこんで いるのです。

「おかあさんの 目の 中に、ぼくが はいって いて、
おかあさん いたくは ないの。」

と たずねました。

おかあさんは、ただ わらって いました。

それから、いつでも おかあさんに だかれる たん
びに、おかあさんの 黒い 目を みました。

ぼくが ないて いる ときは、おかあさんの 目の
中には、なき虫の 小さな ぼくが はいって いるので

す。

わらって いる ときは、小さ

い わらい虫の ぼくが はいっ

て いるのです。

よく 氣を つけて みると、

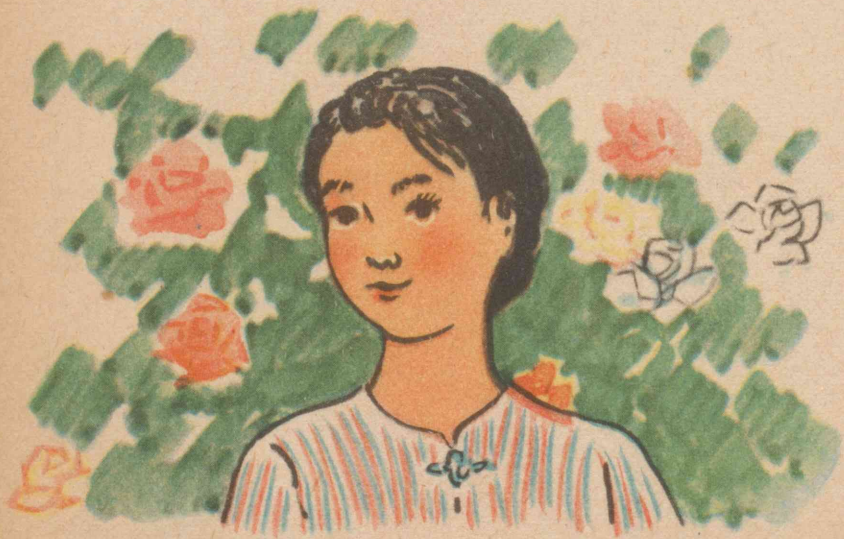
おかあさんの 目の 中には、お

月さまが はいって いる こと

も あります。うつくしい 花や、

カナリヤの はいって いる こ

とも あります。



二 うらの 林

どんぐり

うらの 林で ないて いる、
ゴロスケホウが よんで いる。

「どんぐり ひろいにかかないか、
どんぐり みつけに いかないか」
ホッ、ホッ、ホウ、
ゴロスケホウ。



うらの 林に かかっている、
まひろの 白い 雲の 下。
「どんぐり ひろいにかかないか、
どんぐりごまを つくらぬか」
ホッ、ホッ、ホウ、
ゴロスケホウ。

きょうは にちよう あさっから
 ゴロスケホウが よんで いる。
 「どんぐり ひろいにかないか、
 どんぐり さがしにかないか」
 ホッ、ホッ、ホウ、
 ゴロスケホウ。



もず

もりから
 もずが とびだした。
 ごちやごちやに なって、
 きい きい いて、
 むこうの もりへ いった。
 でんしゃが、
 ぴっ ぴいっ と いった。



三 ねこ

あさ おきると、かまどの ところに、子ねこが ひく
い いきを して ねむって いた。ちゃ色の 毛が、い
きを する ごとに むくっ むくっ して いた。
そおっと あるいて 行って、

「ちゃこ。」と いうと、子ねこは、はっと したように
わたくしの かおを みて、

「にゃあん。」と とびあがりそうに なって、ひげを ぴ
んと はって、かたっぽの 足を あげました。

わたくしが ねこの 毛を ちよっと つまんだら、大
きな 声で、

「にゃあん。」と ないたので、たまげて 手を はなしそ
うに なりました。大いそぎで うらにわに なげこんだ
ら、おどろいて うらにわの むこりの たけやぶの 方
へ、ちよん ちよん と はねて 行って しまいました。



ねこは また こっちへ くるかと 思って いたら、
なかなか きませんでした。

わたくしは、かまから さつまいもの
ふかしたのを とって、にわに できました。
にわの あたにかい ところに むしろの
へんなのを しいて、あったかい いもを
たべて いると、ねこが「にゃあん。」と
ないて、わたくしの ひぎに ちょこりんと
すわりました。

わたくしの いもを たべるのを みながら、



また「にゃあん。」と、なきました。

わたくしが、いもの かわを むいて、ひぎの 上に
おくと、おいしそくに むしゃ むしゃ たべて、たべて
しまうと、わたくしの もんぺの においを いつまでも
かいで いました。

わたくしは かわいそくに なったので、また いもを
半ぶん おいて やりますと、むちゅうで たべました。
すこし たべると なんだか 考えて います。

わたくしが あたまを そつと なでてると、いい きい
もちみたいに 目を ほそく して 考えて います。

それから また いもを すこしずつ たべはじめまし
 た。ひぎの 上が くすぐったいけれど、がまんして い
 ました。

わたくしは、こんど この 子ねこの くびに、赤い
 きれを まいて やろうかと 考えました。



四 かかし

春男は かさを かぶり、きたない
 きものを きて、りょう手を ひろ
 げて だいの 上に たって いま
 す。春男は かかしに なって い
 るのです。

春男は 大きな こえで すずめを
 おいます。



春男「ホーイ、ホイ。ホーイ、ホイ。」

春男は　むきを　かえて、また　大きな　こえで
すずめを　おいます。

春男「ホーイ、ホイ。ホーイ、ホイ。」

春男は　ぐるぐる　まわって、ホーイ　ホイ、ホーイ
ホイを　つづけます。すると、とおくから　ホーイ
ホイを　まねて、ちかよって　くる　ものが　ありま
す。それは　つる子でした。

つる子「まあ、だれかと　おもったら、春男さんだったのね。」

春男は　だまって　こたえません。

つる子「どうしたのよ。なにを　して　いるのよ。」

春男「ホーイ、ホイ。ホーイ、ホイ。」

つる子「ねえ、春男さん、なにを　して　いるのよ。」

春男「すずめをおって いるんだよ。せっかく こんな
に いねが みのったのに、すずめに たべられち
ゃ つまらないからね。」

つる子「ああ、それで 春男さんが かかしに なって い
るのね。」

春男「ただ、すずめをおうよりも、かかしに なって
すずめをおう ほうが おもしろいんだもの。」

つる子「でも、そんなに りょう手を ひろげて いると、
つかれるでしょう。」

春男「うん。」

つる子「あたしが、すこし、かわって あげるわ。」

春男「じゃ、すこし やすもうかな。」

春男は だいから おりて やすみます。つる子が
かわって だいの 上に たちます。

つる子「ホーイ、ホイ。ホーイ、ホイ。」

つる子は ぐるぐる まわりながら、ホーイ ホイ、
ホーイ ホイを つづけます。

春男「そんなに 大きな こえを だすと つかれるよ。」
つる子「ええ、もう すっかり つかれてよ。」

春男「じゃ、かわろうね。」

つる子「ええ、かかしに なるなんて、なかなか たいへん
ね。」

そこで、春男と つる子は また かわります。

春男「ホーイ、ホーイ。ホーイ、ホーイ。」

つる子「ねえ 春男さん、かかしなんか つまらないでしょ。」

う。川へ 行って あそびましようよ。みんな あ
つまって いるのよ。」

春男「だめだよ。ぼくは きょうは かかし なんだもの。」
つる子「じゃ、あたし 川へ いくわよ。かかしが あきた」

ら、いらっしやいね。さようなら。」

春男「さようなら。」

つる子は かえります。

春男「ホーイ、ホーイ。ホーイ、ホーイ。」



右の方で かめきちの 声が します。

かめきち 「おーい。春男くん。川へ いかないか。」

春男は 左の方へ むきます。左の方で たらう
の 声が します。

たらう 「おーい。春男くん。もりへ いかないか。」

春男は 右の方へ むきます。

かめきち 「おーい。春男くん。川で さかなを とらないか。」

春男は くりりと 左へ むきます。

たらう 「おーい。春男くん。もりで かくれんぼを しないか。」

春男は くりりと 右へ むきます。

かめきち 「つまらないの」。
たろう 「つまらないの」。

かめきちも たろうも、
とおくへ 行って し
まったようです。

春男 「ホーイ、ホーイ」。

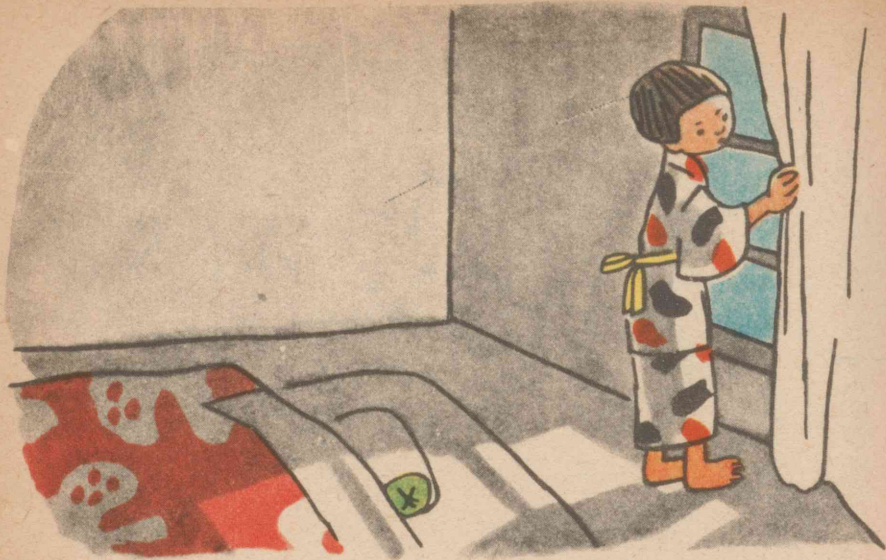
ホーイ、ホーイ。



ああ、つかれた。ぼくも いっしょに あそびたい
なあ。でも、ぼくは かかしなんだ。きょう 一日
は がんばらなくては ならないんだ。

春男は うたいます。

山田の なかの 一本足の かかし
天氣の よいのに みのかさ つけて
あさから ばんまで ただ たちどおし
あるけなひのか 山田の かかし



あけて ください。
 どなたです。
 わたしや 風です、
 トン、コトリ。
 トン、トン、トン、
 あけて ください。
 どなたです。
 月の かげです、
 トン、コトリ。



五 お月夜
 トン、トン、トン、
 あけて ください。
 どなたです。
 わたしや 木の はよ、
 トン、コトリ。
 トン、トン、トン、

六 おちぼひろい

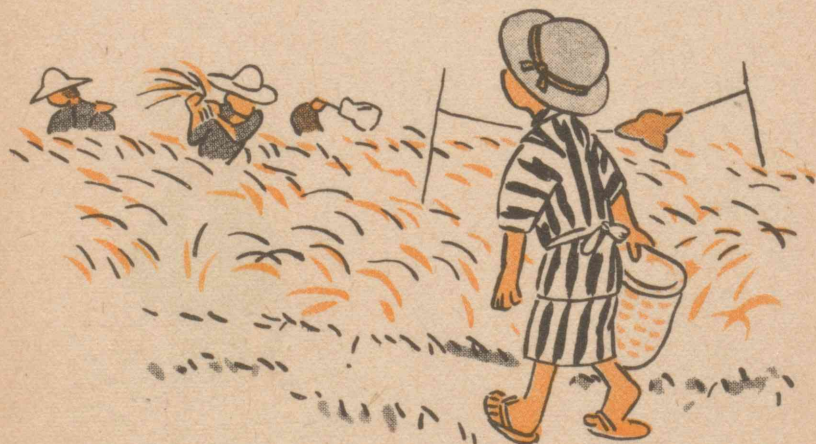
あさ、おかあさんが、

「しげる、学校からかえったら、下のたんぼへ、おちぼをひろいにいっておくれ。」
と、いいました。

ぼくは、学校からかえって、ごはんをたべると、すぐたんぼへいく用意をしました。ふくをぬいで、きものをきました。きものがつめたいように思いま

したが、すぐあたたかくなりました。大きい方のかごをさげ、て、むぎわらぼうしで、そとへでました。そして、かけて、いきました。

たんぼへいってみると、おとうさんとねえさんが、むこうでいねをかっていました。よその人もかっていました。ぼくは、「おとうちゃん。」



とよびました。おとうさんは きこえないのか、そのま
ま かって います。また、

「おとうちゃあん。」

とよんだら、ぼくの方を むいて、

「おうい。」

とこたえました。そして わらいながら、

「いなほ ひろって くれるのか。たくさん ひろって
くれよう。」

と いて、また 一しょうけんめい かりはじめました。
ぼくは すぐ ひろいはじめました。ほの ちぎれて



いるのや、長い ままの ほが たくさん おちて います。
ひろって かごに いれました。おとうさんの ゴムたび
の 大きい 足あとが たくさん ついて います。おか
あさんのも あります。おとうさんの 足あとの 中に、
おちぼが ふみこまれて いました。それを ひろったら、
いなほの かたちが きれいに かけて いました。ぼく
は、

「これは おもしろいなあ。」

と いました。そして そこへ ぼうを たてて おき
ました。



あぜの へんには、くさに まじって みえないように
 なって おちて いるので、ゆっくり あるいて、のこさ
 ないように ひろいました。あぜを かがんでばかり あ
 るいたら、こしが とても だるく なったので、せのび
 しました。こんど かがんだら、ほねが ポキポキと な
 りました。

また 田の 中を ひろって いきました。その うち
 に、あたまの 方から あせが ぽとり ぽとり おちて
 きました。へりも まん中也 みんな ひろったら、かご
 半ぶんより 多いくらいに なりました。それで おとう

さんの ところへ いったら、
 「たくさん ひろったな。下の
 田も ひろって くれ。もち
 米だから きれいな。」
 と いいました。

もち田は 小さい 田なので、
 すぐ ひろいおわりました。か
 ごが おもたいほどに なりま
 した。もう 一ぱいになりそ
 うです。

そのとき、おかあさんが、めかごに　ふろしきづつみを
をいれて　せおって　きました。

「しげる、たくさん　ひろったね。さあ、あがって、いも
を　おあがり。」

と　いったので、おとうさんの　ゴムたびの　足あとを
あるいて　あがりました。

みんなで　いもを　たべました。それから　ぼくは　こ
んどは　ねえさんと　いねを　よせました。ばんまで　よ
せて　かえりました。

七　だいいこんひき

ぼくが　学校から　かえって、よしおと　つみ木の　う
ちを　たてて　あそんで　いたら、おとうさんが　かいし
ゃから　かえって　きて、

「わきち、にいさんと　ふたりで、はたけから　だいいこん
とって　きなさい。」

と　いいました。

ぼくと　にいさんは、車を　がらがら　ひっぱりだし、

ぼくが 車に のりました。車は がたがたして しりが
いたいで、

「しりが いたいよ。」

と いったら、にいさんは、

「なまいきだ。」

と いった はしりだしました。

はたけに つきました。にいさんは、

車を そこに おいて、

「さあ、だいこん ぬくぞ。」

と いった、ぬきはじめました。ぼくも、一本ずつ ぶり



むりと ぬいて、わきに ならべました。そうして だん
だん はたけの すみの 方へ いったら、人の 足より
も 太い だいこんが くびを だして いました。ぼく
が ひっぱって みると、ぬけません。ぼくは、だいこん
の わきに あなを ほって、こんどは まえより 力を
いれて ぬいたら、ズボンと ぬけたので、ぼくは ひっ
くりかえって しまいました。にいさんが、
「おまえ、だいこんに まけて いるのか。」
と わらいました。ぼくは、
「なに、ぼくのより 大きい。だいこん とらない くせに。」



と、いいました。にいはさんは、
「じゃ、くらべっこやろうか。」
と、いいました。ぼくは、くらべ
ようと、思って、
「どれ。」
と、いうと、
「どれでも、くらべて、みる。」
と、いいました。しかし、ぼくの
より、太い、だいこんは、ありま
せんでした。

みんな、ぬいてから、にいはさんは、
は、五本ずつ、そろえて、いきま
した。うすぐらく、なっ
て、でんとうが、つきはじめまし
た。風が、ふいて、きて、
海の方から、まっ黒な、雲が、
やって、きました。
ぼくは、雨が、ふるのかなと、し
んぱいしながら、にいは
んの、たばねた、だいこんを、
車に、つみました。にいは
んは、車に、一ぱい、つんでから、
なわで、くくりつけま
した。そうして、
「さあ、ひくから、あとを、おせ。」
と、いいました。ぼくは、あとを、
おして、いきましました。

すこし いくと のぼりざかが
あつて、ぼくは おす ことが
できません。にいさんも ひっぱ
れなく なりました。にいさんは、
車を ぐるっと よこに まげて
がんばりました。ぼくも、ありっ
たけ 力を だして おうました
が、足が ぬらぬらと なつて
おす ことが できません。
にいさんは、



「一かい やすもう。」
と いった、車を とめました。ぼくが 車の あとに
石を かったら、
「かしこいね。」
と いわれました。ぼくが くつを ぬいで、くさで 足
を ぬぐつて いたら、にいさんが、
「つかれたろう。」
と いました。
それから また 一しょうけんめい おして、やつと
さかを のぼりました。にいさんは、

「もう じき うちだから がんばれ。」
ど いいましたから、ぼくは がんばって うちまで お
して きました。そうしたら、おかあさんに ほめられま
した。



ハ てつだい

ふろたき

ふろを たきました。

しばを もって きて くべると、

もく もく 白い けむりが でて、

ぼくが うらしまたろうに なるのかと 思った。



ときどき きえそうになる。
けむりで なみだが てる。
よく たけない。

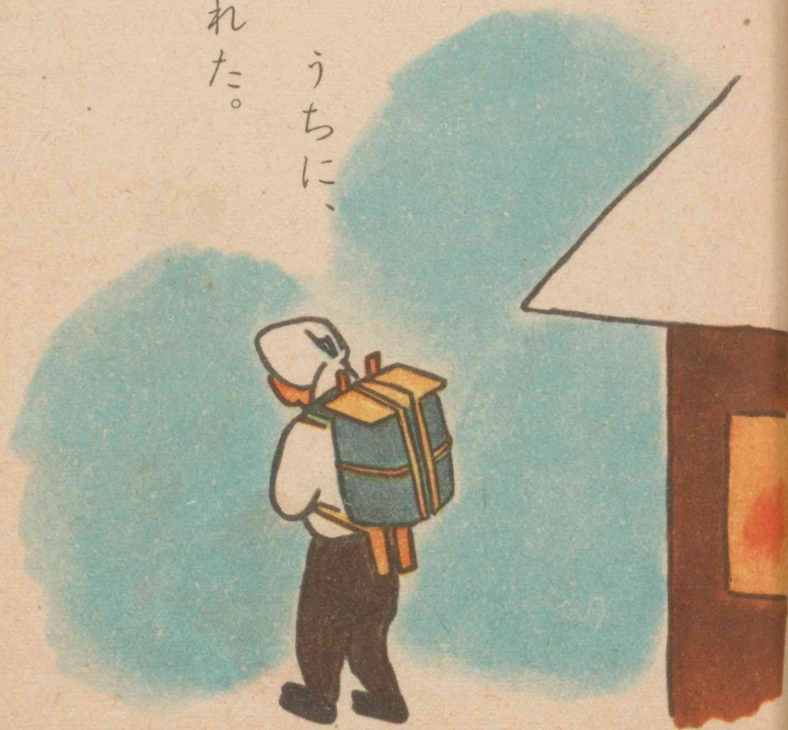
おばあさんが、あつく わかせと いった。
くらく なるまで かった。



ちゃわん

おかあさんは、
まだ よが あけない うちに、
おさかなうりに いかれた。

わたしは、



おかあさんの たべて いかれた、
ちやわんを あらった。

ちやわんは、

しずかな だいどころに、
きちきちと よい音が した。



九 けが

ぼくが、あそびじかんに、せき川くんたちと 一しよに
けりうまを して いたら、だれかが ぼくの 足を ふ
みました。ぼくは、

「いたい。」

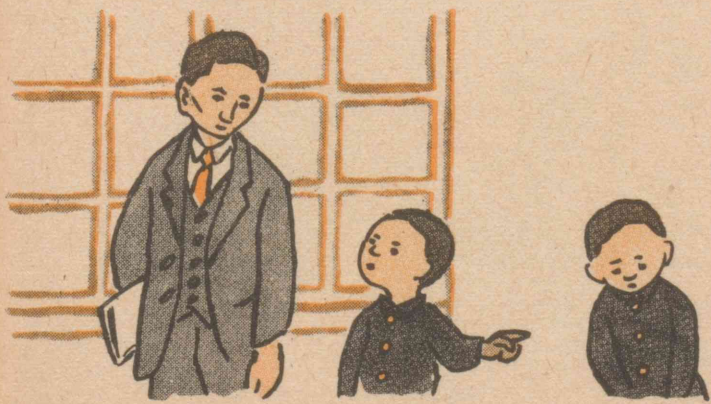
と いました。そして 見たら、右の 足のおやゆび
から、どすぐらい ちが だろどろと ながれて いました
た。ぼくは ちを 見たら、ぞっと して なお いたく

なりました。おやゆびを おさえて がまん したけれど、
も、いたくて いたくて どうとう ぼくは なきだして
しまいました。

その うちに サイレンが なった"
ので、ちんばを ひきひき あつまり"
ました。きょうしつへ はいる とき、
中じまくんが、

「先生、さとうくんが けがを して
います。」

と いました。先生は だまって



いらっしやいました。きょうしつへ はいると、先生は
すぐ みんなに、

「みんな とく本を よんで いなさい。」

と 言ってから、

「さとう おいで。」

と およびに なったので、ぼくは いきました。

「どう したの。」

「けりうまを して、ふまれたんです。」

と、なきながら ぼくは いました。先生は、

「そうか。じゃ、おいで。」



は、わたを もって きて 手を
 ふきました。それから ぼくの 足
 を みて、
 「こっちもか。」
 と、おどろいたような 声で おっ
 しゃいました。みると、左の 足に
 も ちが ついて います。ぼくは、
 「ううん。」
 と いました。

わたに きいろい くすりを つ

と いった ろうかに でした。そうして ろうかを
 ずんずん あるいて いきます。ぼくは 足が いたいの
 で、なきながら ついて きました。
 りかしの まえまで いくと、先生
 は うしろを むいて、
 「さとう、なくんじゃない。その くら」
 い、なんだ」
 と おっしゃいました。ぼくは だまって
 ついて きました。
 そうして、かんだぶさんの へやへ きました。先生
 先生



けて ゆびに あてました。それから、ほうたいを もっ
て きて 足を ぐるぐる まいたので、ぼくは わらい
だしました。先生も わらいだしました。

先生と 一しよに きょうしつへ かえりました。つぎ
の じかんは、たいそうでした。先生は わらいながら、
「さとう、たいそうは やすみなさい。」

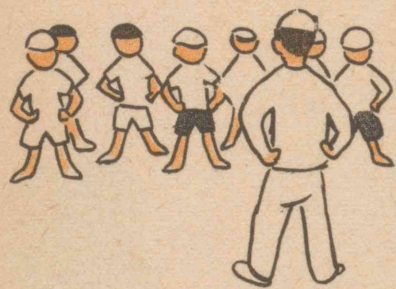
と おっしゃったので、ぼくは やすみました。

かえる とき、ぼくが、

「先生 もう いたく ないです。」

と いったら、先生は、

「そうか。そりゃ いいね。」
と おっしゃったので、ぼくは よろ
こんで かえりました。



十 ことば



おかあさんは、
でんしゃや じどうしゃに 氣を つけて くださいと
います。それから、はなを たらさないように ちゅう
い して くださいます。

おばあさんは、
なにを いても、ただ ふんふんと いう だけです。

うちの となりの しげるくんは、
けむいと いう ことを えぶいと います。おかし
いと 思います。

いもうどの すみ子は、
三つと いう ことばを おぼえました。

すみ子ちゃん 三つ
あんよも 三つ
おめめも 三つ
おてても 三つ



みんな

三つ

これでは おばけですね。

おとうさまは、

なにかのときに、ひょっと じぶんの うまれた いな

かの ことばを つかいます。

とんぼ——あけず

だいこん——でいこ

ごこへ こい——ここさ こい

とても おかしく きこえます。



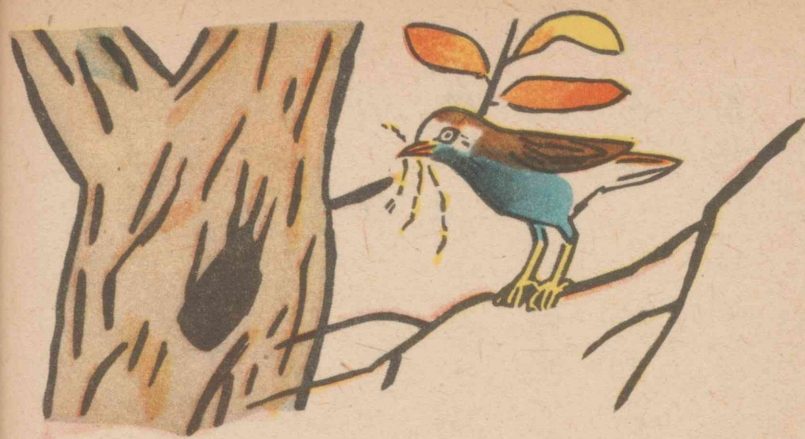
十一 むくどりの ゆめ

ひろい の原の まん中に、たいそう ふるい くりの
木が 立って いました。

木には ほらあなが できて いました。

その ほらあなに、むくどりの 子が どうさんどりと
すんで、いました。

秋も くれて、すすきの ほが 白く なるど、とうさ
んどりは その ほを くわえて、すの 中にもって



きました。

ほは やわらかでした。だから 冬

が ちかづいて、しもが ふっても

みぞれが ふっても、そんなに こま

りませんでした。

けれども、天氣の わるい 日が

つづいて、そとへ 出る 日が すく

なく になると、ある 日、むくどりの

子は、じぶんの かあさんどりに 氣

が つきました。

かあさんどりは もう この よに いないのですが、

そうとは しらずに むくどりの 子は、とおい ところ

に でかけて いったと、そうばかり 思って いました。

どうさんどりが そう おしえたからでした。

ある 日、また むくどりの

子は たずねました。

「おとうさん、まだ おかあさ

んは かえって こないの。」

あたたかな すすきの わた

に くるまって、とうさんどりに



は、からだを まるめて じつ
と 目を とじて いました。

「ええ、おとうさん。」

と きかれた ときに、とうさ
んどりは うすい まぶたを
あけました。そして しずかに
いいました。

「ああ、もう ちょっと まって おいで。」

「いまごろは 海の上を とんでいるの。」

そう むくどりの 子が きくと、

「ああ、そうだよ。」

と、とうさんどりは こたえました。

「もう、いまごろは 山を こえたの。」

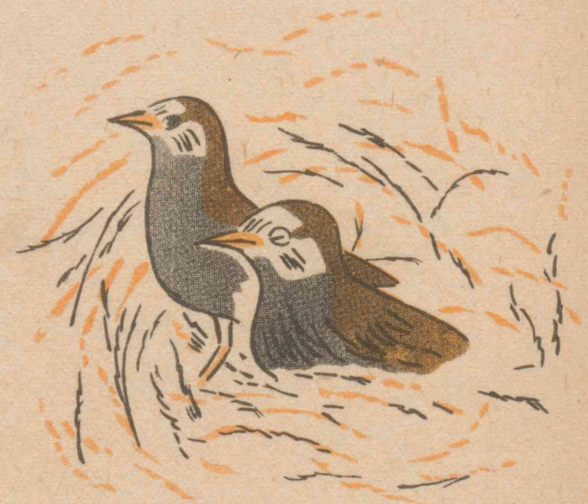
と、しばらく たって また きくと、

「ああ、そうだよ。」

と、とうさんどりは こたえました。

とうさんどりの ようすは、いかにも ものぐさそうに
みえました。

むくどりの 子は それを みて、その 上 きいて
みようと は しませんでした。





ところが ある 夜中でした。むくどりの 子は、ふと
ぽっかり 目が さめました。

かすかな 音が きこえました。

カサコソ、カサコソ。――

耳を すまして きくと、木の ほらの 口もとらしく、
どうやら はねの すりあうような 音でした。

むくどりの 子は、とうさんどりを ゆすぶりおこして
いいました。

「おとうさん、おとうさん、おかあさんが かえって き
ましたよ。」

とうさんどりは、あわてたように 目を
あけました。けれども すぐに、

「いやいや、あれは 風の 音だよ。」

そう 言って、また 目を とじて しまい
ました。

けれども、子どもの むくどりは どうし
ても ねむれませんでした。

こっそりと ほらあなの 出口へ 行って
みました。すると、それは とうさんどりの
いった とおりに、つめたい 風が きいろ



むくどりの子は、目があくど
戸口に、いつて、みました。
みると、その木のどのえだにも
はもう、ちいて、いないのに、
どか、たった、一まい、口も
えだに、ついで、いるのでした。
冬の日は、早く、くれて、
きました。むくどりの子は、
に、とうさんどりのそばに、
むりました。

い、かれはを、ふいて、いるのでした。
「やっぱり、そうかな。」
むくどりの子は、つぶやきました。
ほらあなの中に、もどりま
の、中は、もう、半ぶん、ひ
子は、とうさんどりに、小
足を、ちぢめて、ねむりま
夜が、あけました。あさの
きました。でも、木の、ほ
うすやみが、のこって、いま
むくどりの子は、目があくど
戸口に、いつて、みました。
みると、その木のどのえだにも
はもう、ちいて、いないのに、
どか、たった、一まい、口も
えだに、ついで、いるのでした。
冬の日は、早く、くれて、
きました。むくどりの子は、
に、とうさんどりのそばに、
むりました。

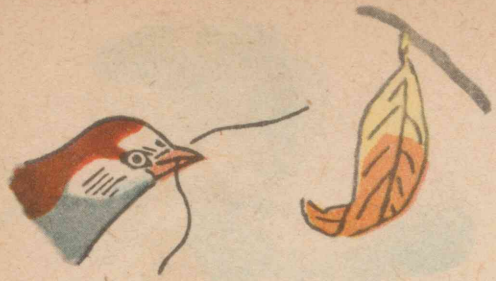
すると、夜中に また ぽっかりと 目が さめました。
それと いっしょに、かすかな 音が 耳の そばで きこえて きました。

カサコソ、カサコソ。――
かれはが なるのでしょう。けれども それは、かあさき
んどりの はねの 音のように きこえました。また、な
にか かあさんどりが ささやくようにも 思われました。
きけば きくほど、なつかしく なって きました。
「なんだった ああいう 音を たてるのかしら。」
むくどりの 子は、ふしぎで たまりませんでした。

風は つよく ふいて いました。
ほらあなの 出口に 出て みると、一まいきりの う
すい はは、しきりに 音を たてて いました。

その はは、いまにも 風に ふきとばさ
れそうに みえました。

むくどりの 子は いそいで ほらあなの
中にはいると、すの 中の ほそい けを
一すじ くわえて、また ほらの 口に出
ました。その けは、長い 馬の おの け
でした。





その けで、むくどりの 子は、かれはの
もとを えだに しっかりと くくりつけ、
しめつけました。

「こうして おけば、どんなに つよい 風
が ふいても 大じょうぶ。」

と、むくどりの 子は 思いました。

大きな 風が ふいて きて、たった 一まいきりの
はを、どこか とおくへ はこんで 行って しまいかも
しれないと、むくどりの 子は 考えたのでした。

ほらあなに もどると、とうさんどりが ききました。

「おまえ、なにを して きたの。」

むくどりの 子は、して きた ことを いました。

とうさんどりは、目を とじて だまって それを き
いて いました。

きいて しまうと、目を あけて 子どもの 鳥を み
まわしました。つくずくと みまわしました。

その 夜の ことでした。むくどりの 子は ゆめを
みました。

どこからか、からだの 白い 一羽の 鳥が とんで
きて、ほらあなに ちょこ ちょこ はいて きました。

むくどりの子は おどろいて、
「あっ、おかあさん。」
と よびました。

けれども、白い その鳥は、
なんにも いわずに やさしい
二つの目で、子どもの鳥を
ながめました。ひるま どうき
んどりが ながめたように、つ
くずくと ながめました。

むくどりの子は、はねを



ならして とびたつて、白い からだに とりすがろうと
しましたが、白い すがたは、その とき ふつつり き
えて しまいました。それと いっしょに むくどりの
子は 目が さめました。

むくどりの子は、まるい 目を して ほらあなの
中を みまわしました。ほらあなの 中は まだ まっく
らでした。

あくる あさ、むくどりの子は 早く おきて、ほら
あなの 出口に 出て みました。

すると、かれにはは うす雪が こなのように かかつ



て いました。

それを みて、ゆうべの ゆめに

きた 鳥は、もしかしたら この

白い はだったのかも しれないと

思いました。

むくどりの 子は、はねで たた

いて、その はの 雪を はらいお

として やりました。

十二 雪

雪の 花

雪が ふって きた。

天の 方を むいて、

雪を 口の 中に いれて くった。

手に とって 見たら、花のようだった。

ふたつ かさなって いる 雪の 花も あるな。

雪の ほらあな

雪の ほらあな

うすむらさきよ。

なかで こどもが

おそなえ してる。

雪の ほらあな

なかから みれば、

海が みえます、

こおった 海が。

雪の ほらあな

日の くれごろは、

赤い ろうそく

三つ 四つ つける。

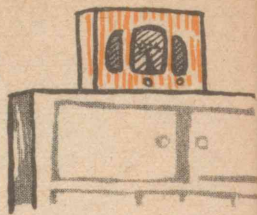
雪の ほらあな

どんより ぬくい。

ねむく なるまで

おはなし してる。





十三 いもうとの につき

十二月二日 水 はれ

まさこが、

「もうすぐ お正月よ。」

と、いいました。わたくしが、

「その つぎは なに。」

と ききました。いもうとが、

「こんどは おぼんよ。」

と いいました。

「そうだったわね。おねえちゃん わすれちゃったわ。ごめんなさいね。」

十二月三日 木 はれ

きょう、まさこが おとうさんに、

「どうして ラジオは ものを いうの。」

と ききました。

「この 中になにが はいって いるの。」
と、また ききました。おとうさんが、



「なにか たべるものは ないかなあ。」
 と いいました。そしたら、おかあさんが、
 まさこが、
 十二月五日 土 はれ

「ずいぶん おそいのね。」
 と いって、まさこは わたくしの そばに
 くっついてばかり います。
 「おねえちゃんたち、あそんで きたのでしょ
 う。」



「この 中にはね、ものを いう きかいが
 はいって いるんだよ。」
 と おっしゃいました。



十二月四日 金 はれ
 学校から かえると、まさこが とんで き
 ました。
 「いま かえったの。」



「その 戸だなに、おだんごが 二つ はいっ
て いますよ。」

と おっしゃいました。まさこは、

「おだんごなんか いや。」

と いました。おかあさんが、

「それでしたら、なんにも ありません。」

と おっしゃいました。



十四 小鳥の うた声

みなさんは、小鳥の なき声を、氣を つけて きいた
ことが ありますか。

え、ある。では、やねの すずめは なんと いった
ないて いますか。

チュン チュン ですって。けれど もっと ほかに、
なんとか いった いないでしょうか。

さあ、よく きいて みましよう。



チユーイン チュツチ チーム チュン。
 チユーイン チュツチ チーム チュン。

耳を すまして きいてみると、こん
 な いい 声で、ないて いますよ。これ
 は たのしくて、うかれて いるのです。
 それでは、むこうの でんせんに とま
 って いる すずめは、なんと いった
 いるでしょう。

チエツ チュン チエツ チュン。
 チエツ チュン チエツ チュン。

これも たのしそうな 声です。

けれども、この すずめは まえのより へたです。
 チエツと チュンと、二つしか ことばを もって
 ないで、それを くりかえして いるだけです。

い
 "

町の すずめは、七つも 八つも ことばを もって
 いる ことが ありますが、いなかの すずめや 子すず
 めは、二つか 三つぐらいしか もって いません。

チュツ チュツ チュツ チュツ チュツ

あ、どこかで、すずめが わるものに
おわれて いるのです。

ジュク ジュク ジュク ジュク。

ほら、たすけて くれと よんで います。

キイ キイ キリキリキリキリ。



もずが ないて います。きっと すずめを いじめた
もずでしょう。けやきの 木の てっぺんで、おを くる
くる まわしながら くやしそうに ないて います。
こんどは、もずの 声を きいて みましよう。

キュー キュー キュー キチキチ キチキチ。

おや、キチキチと いう ときは、口を あけたままで
声を出して います。

あ、ひたきの なきまねを はじめました。

チュピ チュピ チュピ。

さあ、こんどは なんの まねでしよう。

チチピー チチピー チチピー。



ああ、わかった。しじゅうからの なきまねです。

もずは、よく ほかの 鳥の なきまねを します。

もずが なぜ なきまねを するのか、みんなで 考え
て みましよう。

十五 もしも 雲に のれたら

○じろう

もしも、あの 青い 空を ゆっくり うごいて いく
雲に、ぼくが のる ことが できたら、ぼくは どこに
つれてって もらおうかなあ。

そうだ。一ばん さきに、ぼくは お日さまを おいか
けて いく。

ゆうがたに になると、お日さまは いつも きっと 西
の 方に かくれて しまう。その とき、ぼくは 雲に

のって どこまでも おいかけて
いって みるんだ。

お日さまは、きっと ぼくから
かくれる ことが できないで、こ
まって しまうに ちがいない。

それとも、ずっと ずっと 西の
方に、りっぱな お日さまの ごて
んが あるのかも しれないね。



そうしたら、ぼくは、その ごてんに およばれに い
って くるんだ。

きれいな 白い 白い 雲が、早く つれに こないか
なあ。

○たろう

もしも ぼく、風に のる ことが できたら いいな
あ。

風は、たった いま おにわの 花の ところに いた

かと思うと、もう ずっと
とおい 高い 木の てっぺん
で、青い はで ひらひら あ
そんで いるね。

鳥の すの 中に、かわいい
ひなが なんば いるか のぞ
く ことも できて、風は ほ
んとに いいなあ。
ぼく、風に のれたら すぐ
に 海の上へ とんで いく。

そして 大きな 波を、大きな
いわに、どかあん どかあんと カ
ーぱい ぶっつけて やるんだ。
ざざっ ざああつと、白く 天ま
で 波が とびあがるの、ぼく 大
すきさ。

海じゅう とびまわって、白
波を ごうごう たてて みるのも
きつと おもしろいよ。
だけど そんなに あばれてばか



り いないで、大きなにもつを 山のように つんで
とおい おきの 方から かえって くる ふねを、力を
いれて おして やろう。そして、早く みなとへ やす
ませて やるんだ。

それから、空へも ぼくは のぼるんだ。そして 白い
ふわふわ雲と あそぶんだよ。

ふわふわ雲を、ライオンや ひつじのような かたち
こしらえたり、お馬や ぞうのような かたち
こしらえたり、おしろのような かたちにも
こしらえて みる
んだ。



そして、じろりの のって いる 雲

を みつけたら、ぼく すぐに その
雲を おして あげるよ。

お日さまの にげて いく あとから、
ぼくは、一しゅうけんめい じろりの
雲を おして おいかけて いくんだ。

お日さまの ごてんに、じろりを おく
りつけて あげよう。

風、風、ふいて こい。

ぼくを はやく つれて いけ。

十六 さむい ばんの話

つめたい 風が ヒューヒュー 歩いて いる ゆうが
たでした。山が くずれて うちが なくなって しまっ
たので、いのししは ねどこを さがしに かけました。
「どこへ いったら いいかしら。」

つよい はないきで、おちばを ふきとばし ふきとば
し、山を あるいて いたら、きつねに ぱったり であ
いました。



「きつねだ。」

いのししは 考えました。きつねが いつ
か おおかみに おいかけられて いた
ところを、たすけて やった ことが あ
る。その とき、きつねは、「あなたと
しよに すむ ことが できたら、わたし
は どんなに しあわせでしょうと。」いっ
た。そこで いのししは いました

「きみの うちに とめて くれなやか。」

ところが、きつねは、

「うちが、せまいものですから。」

と、いって、かくれるように、走って

いって、しまいました。

「これは、おかしい。」

けれど、いのししは、べつだん、なんと

も、いいません。さむいので、とぶよう

に、かけだしました。

すると、こんどは、しかに、あいまし

た。いつか、木の、えだに、つのを、ひ



っかけて、こまって、いたのを、とって、やった、ことが
ある。その、とき、しかは、あなたは、わたしの、いのち
を、たすけて、くれたのも、おなじですと、いったつけ。

「そうだ。しかの、うちに、とめて、もらおう。」

いのししは、たのみました。ところが、しかは、ちょっと

みただけでした。あたまを、ふりふり、かけて、いって

しまいました。

その、つぎに、いのししは、ぶたに、であいました。む

かしは、おなじ、なかまだと、きかされて、いたので、と



めて くれるだろうと 思いました。そこ
ろが、ぶたも、

「いいよ。」

とは いけません。にげるように あるい
て 行って しまいました。くらく なっ
て 星が きらきら 光りはじめました。
つめたい 風が ふきました。

「おお さむい。」

いのししは、思わず 大きな 木の ほら
あなに はいりました。へんな 音が し



て、ぴかりと なにか とびたちました。

「きみは だれだい。こんばん、ぼくを とめて くれな
いか。山が くずれて うちが なくなって こまっ
てるんだ。」

「それは おきのどくですね。」

上の方で 光る
ものが いました
た。

「わたくしは ふ
くろうです。こ

れから、もりの夜ばんにいくところですよ。はい、
て ゆっくり おやすみなさい。」
「すまないね。」

いのししは ごろりと よこに なりました。ふくろうは
高い 木の 上で もりの 中を みはって います。
いのししは ぐっすり ねむって しまいました。風が
ゴーツと ふいて、かれた おちばを いのししの から
だの 上に かけました。
さむい さむい ばんでした。

十七 ことば あつめ

「先生」

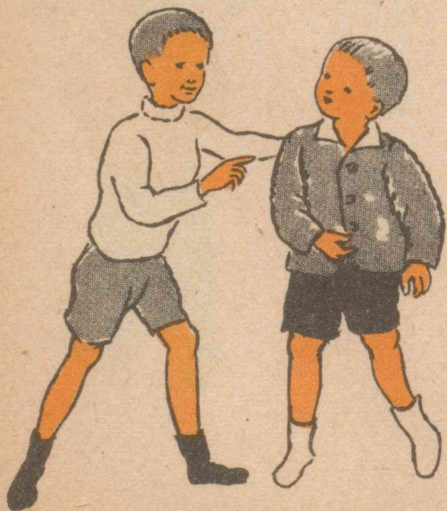
はんたいの ことばを あつめて みましよう。

「花子」

先生の めがねは、大きいね。
先生の めだまは、小さいね。

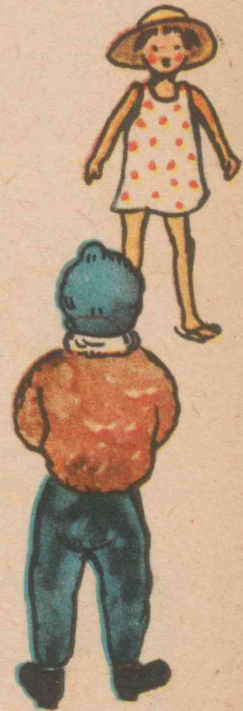
「たろう」

ぼくは、やせて いる。
きみは、ふとって いる。



「さぶらう」

冬は さむい。
夏は あつい。



おともだちと、はんたいの ことばを あつめて みま
しょう。

天 地
上 下
右 左
まえ うしろ



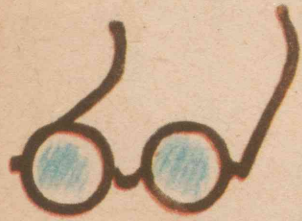
高い ひくい
やね えんの下
わらう なく
先生 生徒



一つの ことばから、思いだした いろいろなことば
を あつめて みましよう。

「先生」——めがね

やさしい
えんそく



はくぼくの こな
ロビンソンの 話

「正男」—— どうぶつの えが うまい。
なきまねを する。
もっと げんきに なった ほうが いい。

「どうぶつえん」——

ライオン
ぞう



さる
かば

けんぶつ人

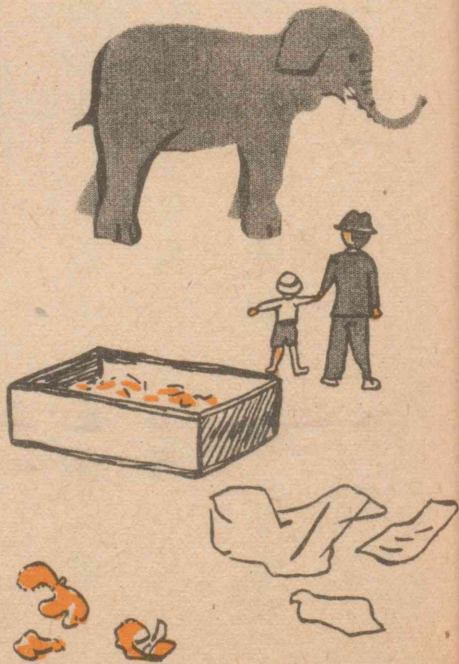
えさ

きっぷうり

みかんの かわと かみくず

どうして みかんの かわや かみくずを 思いだした

の でしょう。じろくんは、どうぶつえんと いう だい
の 作文を 書いて みようと 思いました。



十八 たいようと 北風

北風「なんと いったも ぼくの力は すごいな。か
れはは すっかり ふきとばして しまっし、ゆ
うべも、一ふきで あんなに たくさんの 雪を
はこんで しまったんだからなあ。」
たいよう「やあ 北風くん。たいへんな 元氣だね。でも、
もう いいかげんに して、北の國へ かえ
って くないか。」

北風「やあ、たいようくんか。ねぼけたような かおを
して いるね。」

たいよう「うん、しばらく 南の方へ いったので、
こんどは そろそろ 北の方へ もどろうと
思うんだよ。」

北風「いや、まだ 早いよ。みたまえ、あの きれいな
雪、あれは ぼくが 降らせたんだよ。子どもた
ちは、いまに 雪の中へ とびだして きて、
ころげまわって よろこぶよ。」

たいよう「なるほど、きれいだね。——しかし、あの 雪の

下には、かわいらしい わかめが ぼくを まっ
て いるんだ。もう きみは どきたまえ。」

北風「ここでは ぼくが お山の 大しようだよ。きみ
こそ でしゃばるな。」

「じゃ、こうしよう。どちらが つよいか、ふたり
で カくらべを して、まけた 方が ひっこむ
ことに しよう。」

北風「いいとも、きみなんかに まけて たまるものか。」

こども「ゆうべの 雪は ずいぶん つもったなあ。とな
り村の おじさんの うちまでは まだ なかな
かだぞ。」

「北風くん。みたまえ。ちようど あそこへ こど
もが ひとり やって きた。あの こどもの
がいとうを ぬがせっこ しよう。」

北風「ようし、あんな がいとうなんか、一ふきで と
ばして みせるよ。じゃ、ぼくが 先に やって
みるよ。」

こども「ああ、また ひどい 風が でて きた。早く
いこう。」



北風「がいとうの すそが めくれあ

がったぞ、もう 一いきだ。

ヒュー ヒュー。」

こども「いきが 苦しいほど ふくぞ。

あ、がいとうが ふきとばされ

そうだ。大へん、大へん。ボタンを しっかり

かけて しまえ。」

たいよう「だめだよ、北風くん。こどもは ボタンを かけ

て しまったよ。」

北風「ビュー ビュー。なんの、なんの、これからだよ。

ビュー ビュー。」

こども「からだまで ふきとばされそうだ。がいとうを

からだに ぴったり つけて、小さく なって

いよう。」

たいよう「はっはっはっ。ずいぶん つか

れたようだね。どれ、ぼくが

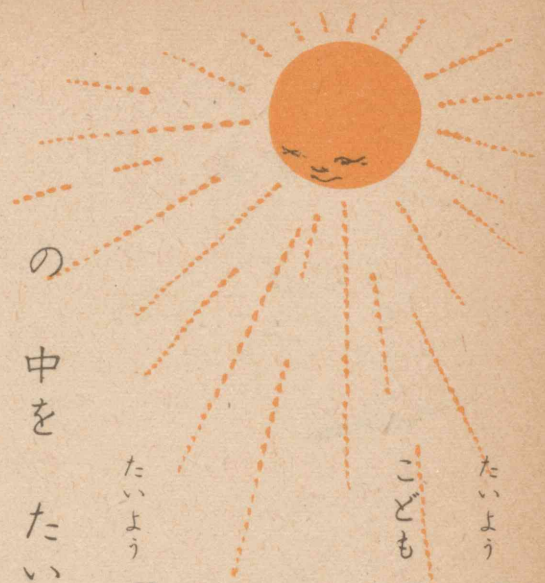
かわろうか。」

北風「ああ、つかれた。ぼくに でき

ないんだから、きみなんかに

できっこ ないよ。」





たいよう「まあ、みて、いたまえ。」

こども「やっと、風が、やんだ。くるしか」

ったなあ。さあ、いそいで、いこ

う。」

たいよう「ぼっちゃん、おつかいですか。雪」

の中を、たいへんですね。」

こども「やあ、お日さまが、出て、きたぞ。うれしいなあ。」

たいよう「わたしの、かおが、みえますか。」

こども「雪が、きらきらして、まぶしいな。」

たいよう「ぼっちゃん、ほっぺたが、赤く、なりましたね。」

こども「あせが、出て、きた。が、いどうの、ボタンを、はずそう。」

たいよう「ぼっちゃん、あたまから、ゆげが、出て、います。」

こども「あつい、あつい。が、いどうを、ぬいで、ここいら」

で、ひとやすみ、しよう。」

たいよう「北風くん。みて、いたかい。」

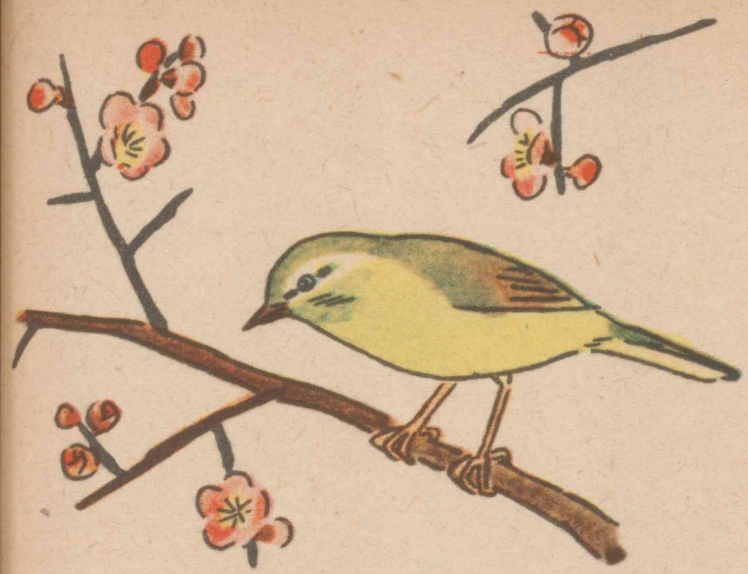
北風「まけた、まけた。ぼくは、北の

方へ、かえるよ。こんどの、冬

まで、さようなら。」



十九 うぐいすの うた



春は いいね。
けれど 春は、
おながか へるね。
こんぺいとうのような
虫が いないかね。

春は いいね。
えだから すべっても
いたくないね。
あさから ないて いると、
声が だんだん よく なる。
ひと声 なくと、
となりきんじよの にわが あかるく なる。

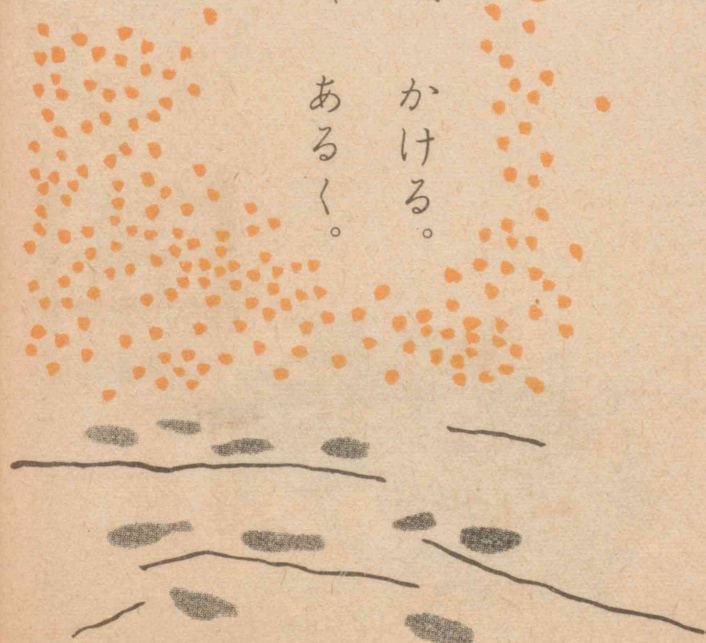


二十 春が くる

春が くる

ぼくは うんどうじょうへ かける。
雪の 上を べちゃべちゃ あるく。
雪の 下を 見ると、
水が ながれて いる。

お日さまを 見た。
まぶしくて みられない。
もう、
春が くるんだな。



麦ふみ

こんもりした 土が、
サッサ、サッサと なる。
ふんだ あとの 麦の めは、
虫のように
うごいて いる。



すぐ くと いったのに、
おかあさんは
まだだろうか。
サッサ、サッサ。
とおくの 方で、
だれか
よんで いるような 気が
する。



おむかえ

きしゃが ポトツと きた。

かあさん きたかな。

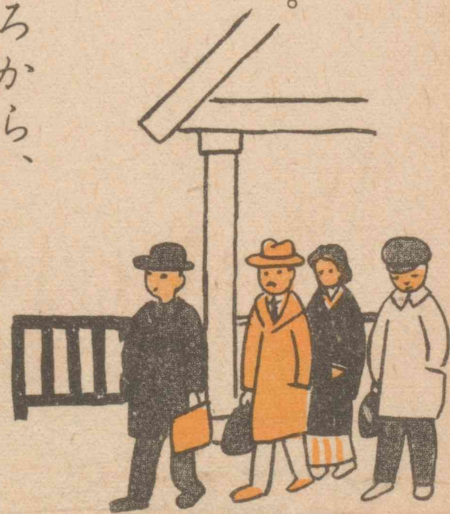
あ、

よその おじさんの うしろから、

ちらっと 見えた。

むねが、どきっとして

うれしかった。



二十一 フィリップと 学校

ロシアの いなかに ひとりの こどもが ありました。

こどもの 名は フィリップと いいました。

ある とき、 きんじよの こどもたちが そろって、 み

んな 学校へ いきました。 フィリップも ぼうしを か

ぶって、 みんなと いっしょに 学校へ いこうと しま

した。 おかあさんは フィリップに いいました。

「フィリップや、おまえは どこへ いこうと いうのだ」

い。

「ぼく 学校へ いくんだよ。」

「おまえは まだ 小さいから だめだよ。らいねんに
なったら 学校へ あがるんだよ。」

おかあさんは そう 言って、フィリップを とめました。
ほかの こどもたちは、みんな 学校へ 行って しま
いました。おとうさんは、あさ 早くから もりの 中へ
しごとに 出かけました。おかあさんは はたけへ でか
けました。うちには、おばあさんと フィリップだけが
のこって いました。おばあさんは、ペチカの まえで

ねむって いました。

ひとりきりに なった フィ

リップは、たいくつに なって

ぼうしを さがしはじめました。

じぶんの ぼうしが みつか

らないので、おとうさんの 大

きな ぼうしを かぶって、学

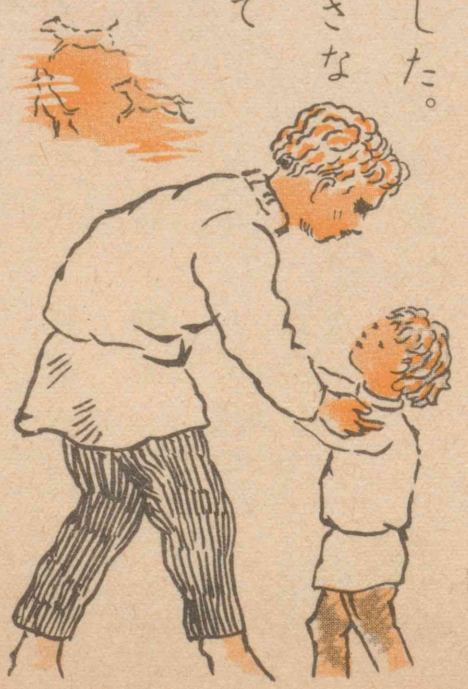
校へ 出かけました。



学校は、とおい 村はずれに ありました。フィリップが、じぶんの うちの ちかくを あるいて いる ときは、犬たちは、フィリップに ほえついたり しませんでした。犬たちは、みんな フィリップを よく 知って いたか。らです。すこし はなれた ところへ くと、フィリップを みて、門の 中から、はじめ 小さな 犬が ほえ。かけだして きました。その あとから、大きな 犬が 出て きました。フィリップが こわく なって かけだすと、犬も フィリップの あとを おいかけて きました。

フィリップは 大きな 声を だして にげましたが、なにかに つまづいて ころびました。ひとりの おひやくしゅうさんが 出て きて、犬たちを おいはらってくれ、フィリップに いました。「なんだって おまえは 小さな こどもの くせに、ひとりで こんな ところを 走って いるんだね。」

フィリップは なにも いわずに、おちた ぼうしを ひろって いっしょうけんめいに かけだしました。



フィリップは 学校の 門の ところまで、むちゅうで
いきを きらして かけて きました。うんどうばには
だれも いませんでした。きょうしつの中、こどもが
がやがやする 声 が きこえて いました。フィリップは
なんだか しんぱい になって きました。

「先生に しかられや しないだろうか。」
フィリップは どうしようかと 考えはじめました。あ
とへ かえると、また 犬に ほえつかれるだろう。学校
の 中へ はいって いくのは、なんだか 先生が こわ

いような 気が する。

学校の そばを、ひとりの 女の人 が バケツを き
げて 水を くみに いきながら、フィリップに いま
した。

「みんな べんきょう
して いるのに、どう
して ぼうやは ひと
りだけ、こんな ところ
に たって いるんだ
ね。」





「さあ、なにも いわないなら、はやく
 じぶんの うちへ おかえり。」
 フィリップは なにか いいたいのだけ
 れど、なんだか おそろしい 気が して、
 のどが からからに かわいて、なにも
 いう ことが できないのです。そして、
 先生の かおを じっと みて なきだし

フィリップは 学校の中へ はいって いきました。
 いらぐちで ぼうしを ぬいで、きょうしつの ドアを
 あけました。きょうしつには こどもが いっぱい いま
 した。先生は、みんなの あいだを あるいて いました。
 「きみは なにしに きたのだね。」
 先生は フィリップを みて ききました。フィリップ
 は ぼうしを つかんだまま なにも いいませんでした。
 「きみは どの なんと いう 子だね。」
 フィリップは だまって いました。
 「きみは おし なのかい。」

て しまいました。

先生は フィリップが かわいそうに なりました。あ
たまを なでて やりながら、ほかの こどもたちにも、こ
の こどもを 知って いるかと ききました。

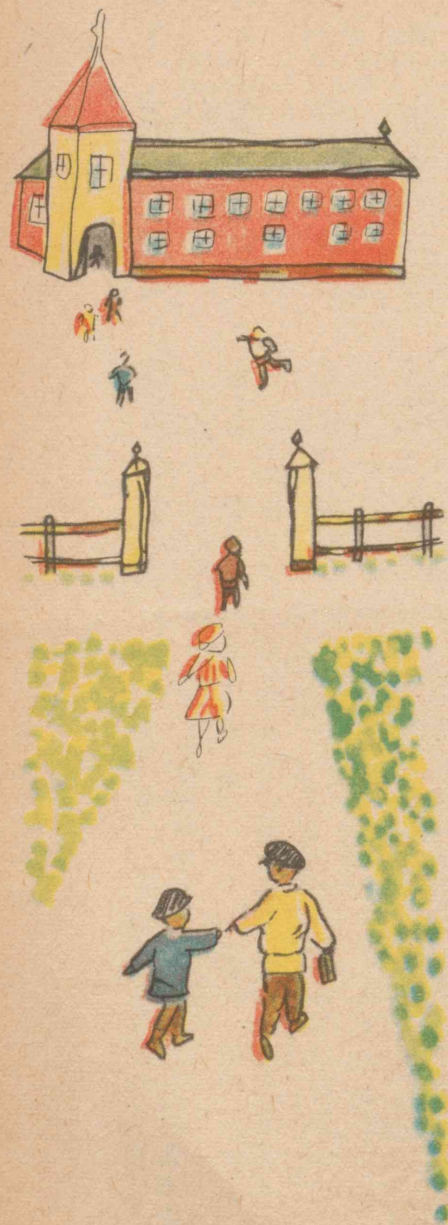
「それは、コスチャの 弟の フィリップです。ずっと
まえから、みんなと いっしょに 学校へ いきたいと
いうのです。けれど、まだ 小さいから、おかあさんが
出さないんです。きっと、おかあさんの いない とき
に、ひとりで 学校へ やって きたんです。」

「じゃあ、にいさんの そばへ おすわり。先生が おか
あさんに そう 言って、学校へ あげて もらうよう
に して あげるから。」

先生は、フィリップに 一年生の とくほんを みせま
した。フィリップは もう すこしずつ よむことが でき
きました。

「さあ、じぶんの 名を よんで ごらん。」

先生は こくばんへ、「フィリップ。」と かきました。
「フィ、リップ、プ フィリップ。」



先生は フィリップに いました。
「きみは、じまん するのは あとにして、まず べんき
よう しなければ いけないよ。」
フィリップは、それから まいにち、みんなと いっし
よに 学校へ いくようになり ました。

みんなが わらいました。
「えらい、えらい。だれに
よむことを おそわった
のだね。」
フィリップは 元氣に
なって いました。
「コスチャに おそわったの。
ぼく、すぐ おぼえて しまうの。
ぼくは とても りこう”
なんだもの。”



Copyright 1948, by
The Nihon Shinkyōiku Kenkyukai

All rights reserved

The text of this publication or any part thereof
may not be reproduced in any manner whatsoever
without permission in writing from the authors.

小国203

Approved by Ministry of Education
(Date Aug. 26, 1948)

編者
四

東京都大田区雪ヶ谷町
財団法人 清明学園初等学校内
理事 長 濱野重郎
編修長 照井猪一郎
担当執筆者
自由学園初等部主事 佐藤瑞彦
成城学園小学校教諭 馬場正男
成進学園主事 中村万三
成蹊小学校教諭 佐藤茂
学習院初等科教諭 杉山勝榮
同 松山市造
東洋英和女学院小学部教諭 石澤芳子
表紙とさしえ
中尾彰
齋藤長三

昭和二十三年八月二十六日印刷
昭和二十三年八月三十日発行

定価 円 銭

著者 財団法人 日本新教育研究会
会長 高橋誠一郎

発行者 学校図書株式会社
代表者 川口芳太郎

印刷者 図書印刷株式会社
代表者 川口芳太郎

発行所 学校図書株式会社
東京都港区芝三田豊岡町八番地

発行所 学校図書株式会社
東京都港区芝三田豊岡町八番地

(本書の指題語・ワキアツク・註釋等並びに、これに類する一切のもの無断發行を禁ずる。)

世 林 左 太 町 書 知
(4) (8) (24) (39) (85) (107) (126)

界 雲 用 原 波 北 弟
(4) (9) (30) (59) (93) (108) (132)

星 毛 意 出 話 元
(4) (12) (30) (60) (96) (108)

王 半 多 正 夏 苦
(4) (15) (34) (78) (104) (112)

氣 考 米 金 文 麦
(7) (15) (35) (80) (107) (120)

原 作 者

「おかあさんの目」 (吉田絃二郎)
「うらの林」 (巽聖歌)
「どんぐり」 (巽聖歌)
「ねこ」 (児童作)
「かかし」 (齋田喬)
「お月夜」 (北原白秋)
「おちばひろい」 (児童作)
「だいこんひき」 (児童作)
「てつだい」 (児童作)
「ふるたき」 (児童作)
「ちゃん」 (児童作)
「けが」 (児童作)
「ことば」 (児童作による)
「むくどりのゆめ」 (浜田廣介)
「雪」 (児童作)
「雪の花」 (北原白秋)
「雪のほらあな」 (北原白秋)
「小鳥のうた」 (白井邦彦)
「もしも雲にのれたら」 (徳永壽美子)
「さむい」 (西山敏夫)
「ことば あつめ」 (西山敏夫)
「たいようと」 (北風)
「うぐいすのうた」 (室生犀星)
「春がくる」 (児童作)
「春がくる」 (児童作)
「おむかえ」 (児童作)
「ファイリツプと学校」 (トルストイ)

広島大学図書

0130449585

